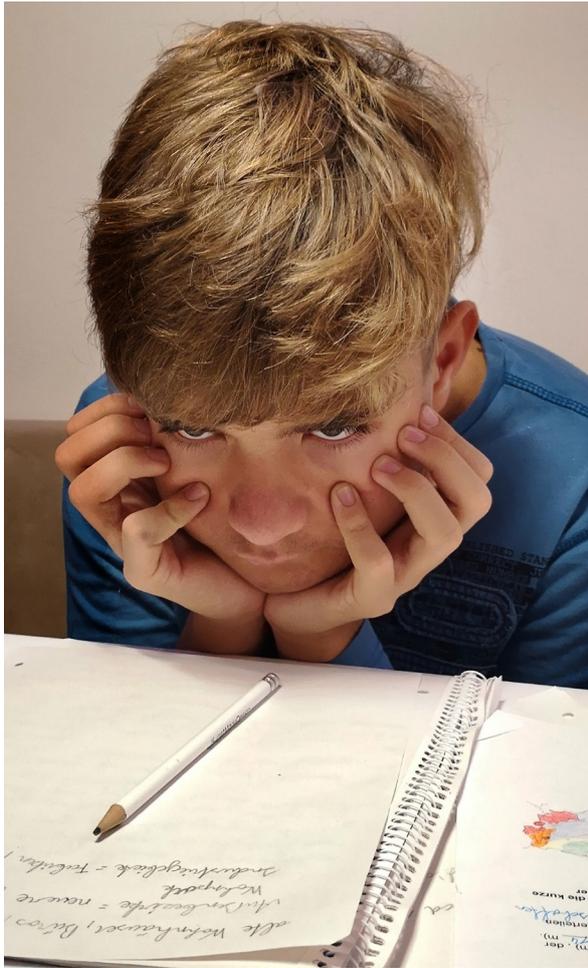


自閉症スペクトラム障害の生徒の不安に対する認知行動療法の介入は不安を軽減することができる



全体的に、不安に対する介入の効果は、治療後の時点で、待機リストと治療を受けた通常の対照状態と比較して、統計学的に有意な中等度から高水準の効果を示した。

このレビューの目的は何か？

このキャンベル系統的レビューは、自閉症スペクトラム障害の学齢児における不安を軽減するための介入の効果を、通常の治療と比較して検討している。このレビューでは、実験的または準実験的デザインを用いた24の研究からのエビデンスを要約している。

自閉症スペクトラム障害の生徒の不安レベルを低下させるための認知行動療法の介入は、中程度の効果を示す。

このレビューでは何を検討したのか？

不安は自閉症スペクトラム障害(ASD)の学齢児童に共通の問題である。

認知行動療法(CBT)やその他の心理社会的介入は、ASDを持つ生徒の不安を治療するための薬理的介入に代わるものとして開発されてきた。

このレビューにはどのような研究が含まれているか？

931人のASD(知的障害を併発していない)および臨床的不安を有する学齢期の子どもたちを対象とした24件の研究が本レビューにまとめられている。これらの研究は、十分な方法論の質があり、バイアスのリスクが低いと判断された実験的または準実験的対照試験であった。研究は2005年から2018年までの期間にわたっており、主にオーストラリア、イギリス、アメリカで実施された。

調査対象となった介入は、臨床、学校をベースとしたもの、または在宅をベースとしたもので、グループまたは個人の治療形式を持つものであった。22件の研究ではCBT介入が用いられていた。1件の研究ではピア・メディエーションによる演劇療法が用いられ、1件の研究では不安を軽減するためのタイの伝統的なマッサージの効果が検討された。ほとんどの介入は親や保護者が関与し、対面で行われていた。

このレビューの主な知見は何か？

治療後の時点で、待機リストと治療を受けた通常の対照状態とを比較すると、全体的に、不安に対する介入の効果は、統計学的に有意な中等度から高水準の効果を示した。

しかし、効果は生徒の不安を誰が報告するかによって異なる。臨床医の報告では非常に高い統計的に有意な効果を示し、保護者の報告では高い有意効果を示し、自己申告ではASDを持つ生徒の不安の軽減に対して有意な効果は中程度だった。

生徒のみの介入よりも、保護者が関与した治療の方が大きな効果がある。また、個人的な1対1の介入では、仲間とのグループで実施される治療に比べて効果が大きい。



このレビューはどれぐらい最新のものか？

レビュー執筆者は2018年末までの研究を検索している。

キャンベル共同研究とは何か？

キャンベル共同計画とは、系統的レビューを公表する、国際的、任意的、非営利的な研究ネットワークである。本組織は、社会科学や行動科学の領域における取り組みのエビデンスを要約し、その質を評価している。本組織の目的は、人々のより良い選択とより良い政策決定を支援することである。

この要約について

この要約は、Hillman, K, Dix, K, Ahmed, K, et al.らによる「Interventions for anxiety in mainstream school-aged children with autism spectrum disorder: A systematic review (自閉症スペクトラム障害を持つ通常学級の学齢児童の不安に対する介入：系統的レビュー)」に基づいている。

この要約の作成のためのアメリカ研究機関からの財政支援に感謝の意を表す。

レビューに含まれているほとんどの研究にはバイアスのリスクの問題がいくつかあるが、これは主に、参加者を治療群に盲検化できないというやむを得ない制限に起因しており、推定された効果が上方に偏る可能性がある。

また、3分の1の研究では無作為化の記述にも限界があり、所見は注意して扱われるべきである。

このレビューの結果は何を意味するのか？

本知見は、ASDを持つ学齢期の子どもの不安症状を軽減するように設計された介入、特にCBTを支持するエビデンスを提供している。

これらの知見は、ASDの子どもおよび青少年における不安症状を軽減するための介入の有効性に関する以前の系統的レビューの知見と一致し、その上に築かれている。しかし、現在の所見にはバイアスのリスクがあるため、より大きなサンプルサイズの研究を行い、可能な限りバイアスの可能性を減らすことが有用である。



AMERICAN INSTITUTES FOR RESEARCH®